



町多目的航空公園に到着し、試験に向けた機体整備が行われるヘリコプター「MuPALe」

へり騒音軽減で試験開始

NALで航法の実用化目指す

【大樹】独立行政法人・航空宇宙技術研究所（NAL、本部東京）は10日、大樹町多目的航空公園で、多目的実証実験機のヘリコプター「MuPALe（ミューパル・イフシロン）」を使った試験を始めた。2000年に続き2回目。①ヘリの騒音軽減②気象観測（風）③GPS（全地球測位システム）の技術確立の3分野で、計8種類の試験を実施。大樹では23日まで、各種データを取得する。

（浅井文人）

風観測やGPS技術確立も

NALの飛行システム研究センターなどから18人が参加する。初日はNALの奥野善則主任研究員らが現地入りし、滑走路上で操舵（そうた）の応答試験などを実施した。騒音軽減試験は、主に降下時に聞こえる「バタバタ」という耳障りな騒音を、極力減らす航法の実用化を目指す。今回は機体の外や滑走路上に設置したマイクで騒音を計測する。同公園から数分離れた遠方地点でも騒音を測定。これらのデータを基に、機体の音の出どころや、周囲への音の伝わり方を調べる。

GPSの試験では、へりとして利用するため、基地に送信アンテナを搭載し、上空から電波を地上の複数の地上局に発信し、測位する。人工衛星ではなく、飛行船など上空を滞留する飛行（ひし）に飛来。風観測に関連した試験を行う。

24日からは、へりと入れ替わりでプロペラ機のピーチクラフトが同公園に飛来。風観測に関連した試験を行う。

気象観測は、国が計画する成層圏プラットフォーム計画に関連して実施。飛行船に影響を及ぼす風のデータを、へりの機体外部に取り付けた計器で取得。同公園内にある「VHFレーダー」が計測したデータと比較し、相互検証する。